



校長室だより～湘南の空～

第18号

令和5年3月7日

走り始めると夢中に

第8号で紹介した本校27回生でラグビー部、セコム創業者・最高顧問の飯田亮さんが1月7日、心不全のため逝去した。89歳だった。

飯田さんは父に言われた次の言葉をよく思い出したという。「お前は走り始めると夢中になり、前に壁があっても気づかないような性格だ。壁に激突してもしばらくは気づかず、額に当てた手に血がついているのを見て、初めて気づくような男だ。」

飯田さんは「誰もやっていないこと」への挑戦に何より生きがいを感じる起業家だった。1962年に日本初の警備保障会社「日本警備保障」（現セコム）を創業。64年の東京オリンピックでは選手村の警備を担当し、日本に民間警備業が定着するきっかけとなって3兆円産業の扉を開く。80年代には京セラ創業者の稲盛和夫氏らと第二電電（現KDDI）の設立に加わった。「自分にとって経営は彫刻のようなもの」と語り、新しい事業の創造を続けた。

（日本経済新聞 2023/1/14）

飯田亮さんのご冥福を謹んでお祈りいたします。

——大きな会社になったねと言われても、嬉しくもなんともない。

社会にとってセコムはなくてはならない会社だね、と言われると本望だ——

湘南の身近な草との語らい

先日、松本千鶴さん（45回）の植物画集「湘南の身近な草との語らい」を手に入れた。湘南の身近な雑草をほぼ網羅した、270図の魅力ある雑草たちであふれる画集だ。それぞれの画に添えられた解説文は、今は亡き千鶴さんの夫松本文人さんを含む7名による共著「身近な草・きのことの語らい」（1994年藤沢市教育文化センター刊）のものを使っている。千鶴さんと文人さんは「いつか私が絵を描き、主人に解説文を書いてもらって本をつくりたい。」と話していたそうだ。

画集の前書きに「エマーソンは『雑草とはその価値が未だ知られていない植物である』との言葉を残している。（中略）私は雑草を絵に描くことでその魅力や輝きを私なりに人々に伝えたいと思う。」とある。両著のタイトルに共通する「～との語らい」には、雑草の中にあるとてつもなく豊かな世界に対する感動が込められている。人が自分の中に眠るものに気づき、引き出したり、仲間の良いところを見い出して励ましたりする心に通じているのではないか。

実際に本を開くと、植物画と解説文がハーモニーのように響いてくる。ページをめくるとそこには植物を愛する人々の思いが旋律のように流れ、私は演奏会に足を運んだような気分になった。

松本千鶴さんは東京藝術大学卒業後植物画を学び、個展を多数開催し、2018年12月～2019年3月に湘南高校歴史館ギャラリーで「松本千鶴の枯れた植物の魅力展」を開催、現在は植物画教室を主宰している。

画集「湘南の身近な草との語らい」は本校図書館の蔵書となっているので、機会があったら「鑑賞」してほしい。

「普通の人」にならなくていい カニササレアヤコさん

お笑いと雅楽。一見何の関わりもない2つを組み合わせで一躍脚光を浴びた本校87回生の雅楽芸人がいる。2022年8月25日、経済誌「Forbes JAPAN」の「世界を変える30歳未満の30人」に選ばれた。お笑い芸人でありながらエンジニア、昨春からは東京藝術大学邦楽科にも通い始めたカニササレアヤコ（川上彩子）さんの「伝統芸能の裾野を広げたい」という記事がタウンニュース藤沢版2022年9月23日号に掲載された。

「平安装束をまとい、雅楽器の笙（しょう）を携えた女性が雅な口調で語りだす。『ものまねをします。十から下、下から乙への合竹の手移りの際、八の後うちを忘れてしまう、東儀秀樹』ピン芸人の日本一を決める「R-1グランプリ2018」の決勝戦で披露したネタだ。」

片瀬中学校、湘南高校を経て「お笑いサークルが一番面白いから」という理由で早稲田大学に進学。子どもの頃からお笑い好きで、中学校では文化祭で同級生と漫才を披露したり、湘南高校では「お笑い研究会」を立ち上げたりもした。

「卒業後は長くお笑いに携わろうと、エンジニアとして勤務しながら『二足のわらじ』で活動。R-1出場後はテレビ出演の機会も増えた。」

東京藝術大学で腰を据えて学ぼうと、雅楽だけでは生計を立てることが難しい業界の実情も知ったという。

「雅楽の面白さを伝えて、携わる人口を増やしたい。」

2018年、カニササレアヤコさんは、本校の「進路のてびき」に寄稿している。「若い頃は、自分が人と違っていることに敏感になりがちです。でも、大人になってみると『人間はみんなどこかしら変だし、それを活かしつつ、補い合って生活するのが一番楽で生産的だ』ということにみんな気がついてきます。ぜひ、自分の個性を殺さずに、最大限発揮できる舞台を探してみてください。湘南にはきっとそんな場所があるはずです。」型破りなスタイルで、新たな境地に挑戦しているカニササレアヤコさんの今後の活躍に注目したい。

卒業おめでとう

98回生の皆さんは、緊急事態宣言下で入学式にも制約を受け、しばらく登校が難しい状況が続いた。一方で、このような状況下だからこそ、学校は何のために存在するのか、勉強は何のためにするのか、学校行事の意味は、部活動は必要か…のようなことを考えたのではないかと。「そもそも何のために」というところから考え、一つひとつの活動の意味を意識するようになり、考え抜いて、借り物ではない、唯一性の高い活動を増やすことができた。これは、パンデミックがもたらしたプラスと考えている。できるのが当たり前でなくなって、できることの喜びと感謝の心を持った湘南生が周囲の人々を勇気づける場面が増えたように思う。昨年9月17日は、湘南の絆が織りなした日本一の体育祭だった。

湘南で培った力を信じ、やりたい分野から世界を動かしてほしい。

皆さんの今後の活躍を心よりお祈りいたします。

——あなたは世界をどう変えますか——

Always do what you are afraid to do.